

12	小	国311
二葉		

教育部
資料室
文部省検定済教科書
新教育実践研究所編

国語の本

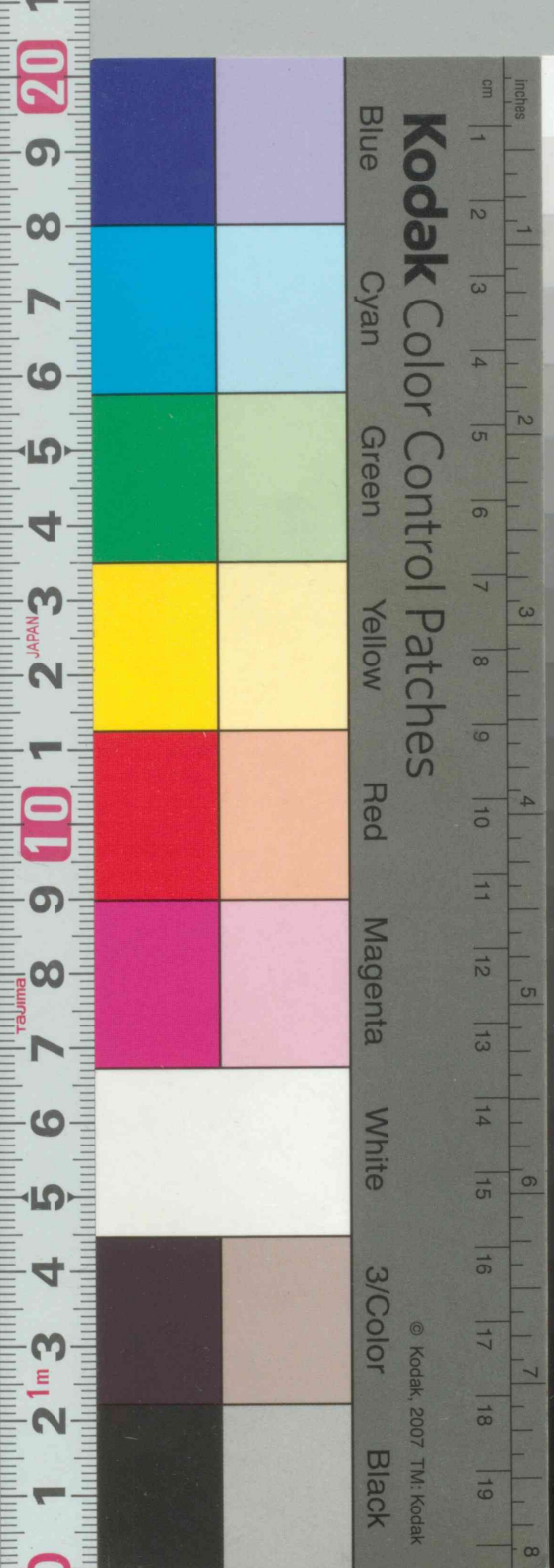


小・KC
F97

5

三年上

教
34
013



Kodak Color Control Patches

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

60136

教科書文庫

6
810
34-1950
01304
49936



広島大学図書

0130449936



第三学年
上

国語の本
五

寄贈

教科書文庫

6

810

34-1950

0130449936



昭和二十五年
文部省
検定済
小学校国語科用



中央図書館

広島大学図書

0130449936



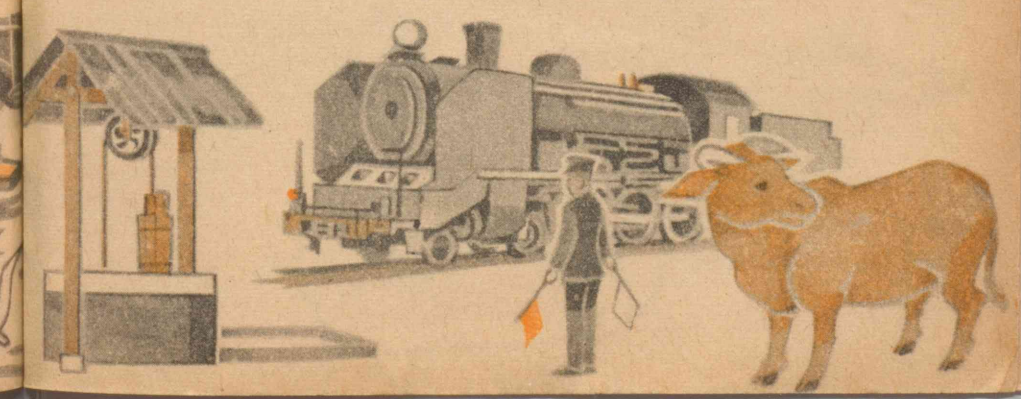


おけいこの手びき..... 115
 あたらしく出たおもなことば..... 118
 かん字..... 120

- 十二 ふしぎな森..... 98
- (一) 帰るつばめ..... 94
- (二) とんでくるかん..... 96
- 十一 帰る鳥くる鳥..... 94
- 十 魚市場..... 81
- (三) 町から..... 78
- (二) 山から..... 75
- (一) 海から..... 73
- 九 夏のおたより..... 73
- 八 ぼくのヨット..... 64

- 七 さいしゅう..... 58
- 六 つぎたし話..... 45
- (四) 水くみ..... 43
- (三) 身体けんさ..... 41
- (二) 牛..... 39
- (一) 駅ではたらく人..... 37
- 五 駅ではたらく人..... 37
- 四 おたまじゃくし..... 28
- 三 るすばん..... 20
- 二 えんそくの紙しばい..... 9
- (二) さくらのとて..... 7
- (一) 空..... 4
- 一 空..... 4

もくろく

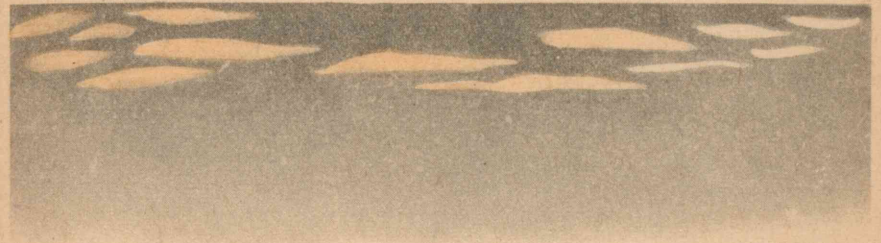




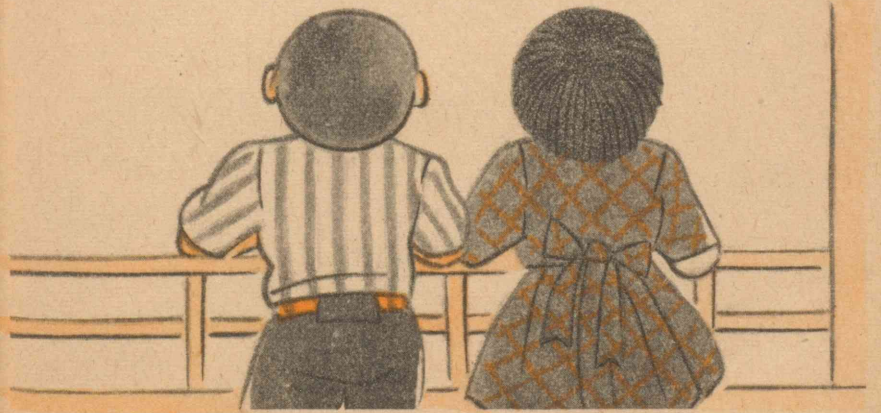
空はいつもあたらしい。
空はどこにでもある。
空を見ていると、
どこかへ行きたくなる。
空はひろい。
世界もひろいだらうな。



まどをあけて
空を見る。
— 空 —
(一) 空



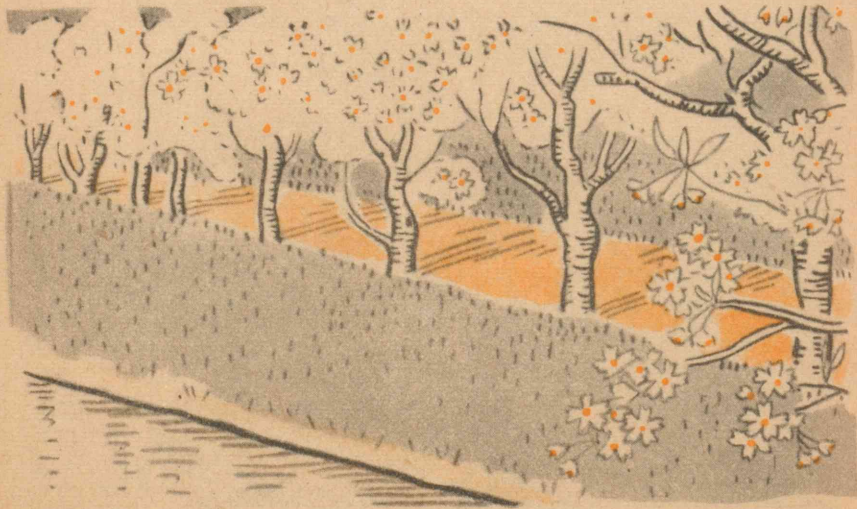
世界の友だちに
手紙を出したいな。
なかよくなりたいな。
まどにもたれて
空を見る。
空はいつも光っている。



(二) さくらのどて

むかし川があふれて、
この町にはよく水が出た。
そこでおじいさんたちが、
どてをきずいた。

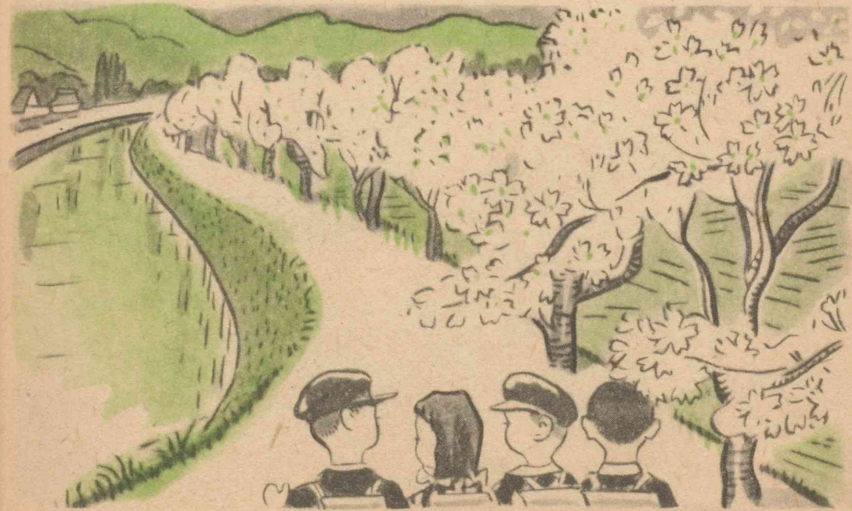
それから長い年月がたち、
どてにうえたさくらのなみ木は、
みんな大きくなって、
春ごとにうつくしくさいた。



ぼくらは毎日
学校の行き帰りに、
このどてを通る。

どての道は川にそって
まがりながら、
となりの村の方へつづいている。

どての上は、
ことしもさくらの花ざかりだ。



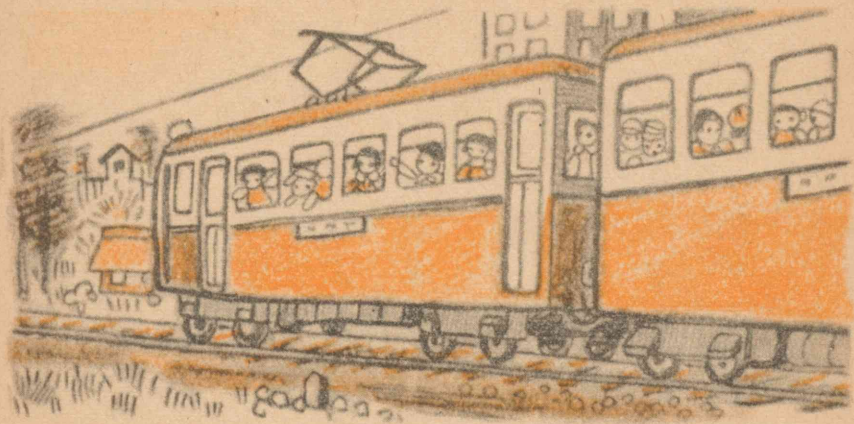
二 えんそくの紙しばい

たのしい中川のえんそくがすんだ
あくる日のことです。

あきらさんたちは、みんなてそう
だんして、きのうのえんそくを、紙
しばいに作りました。

ばめんの絵は、あきらさんたちで、
せつめいの字は、春子さんたちのう
け持でした。





一のばめん

空は青空、よい天気。

きょうはたのしい、えんそくよ。

みんなにここにこ、うれしそう。

リックの中では、りんごやみかん、
やっぱりにここにこ、おどってる。

みんなでうたいながら、中川行の電車にのりました。電車は、町や林を通りぬけて、走って行きます。

二のばめん

中川のどてにのぼりました。

「川だ、川だ。」

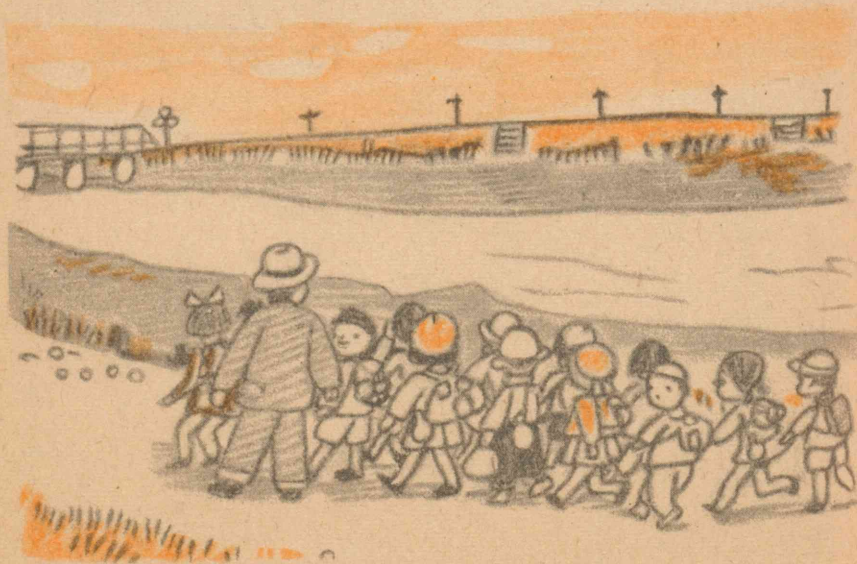
「きれいな水だよ。」

「先生、水のそばに行きましょう。」

みんな大よろこびです。

先生は、

「では、あぶなくないように、
気をつけて行きましょう。ふ





えがなったら、すぐ集まるの
ですよ。」

と、おっしゃいました。

三のばめん

男一「きれいだなあ。あつ、小
さなさかなだ。」

男二「どこ、どこ、ああ、ほん
とうだ。一ぴき、二ひき。」

女一「つめたい水ね。ハンカチ
ぬらしましようよ。」

女二「わたしもぬらそう。ああ、つめたい、いい気持ね。」

男一「中川の水だから、のんでも大じょうぶだね。」

男二「いくらきれいに見えたって、のんではいけないよ。」

男一「だってきみ、ぼくたちが毎日つかっている水道は、中
川の水だよ。——先生、この水のめますね。」

先生「なるほど、わたくしたちは、毎日この中川の水をのん
でいるわけですね。でも、この川の水をそのままのん
でいるわけではありませんよ。」

男一「なぜですか。」

先生「水道の水が、学校や家にくるまでには、きれいにこし
たり、くすりでしょうどくしたりしてあるのです。」



四のばめん

どての上をならんであるきました。
た。

先生「川の両がわにどてがあるでしよう。このどては、なんのためにつくってあるのか知っていますか。」

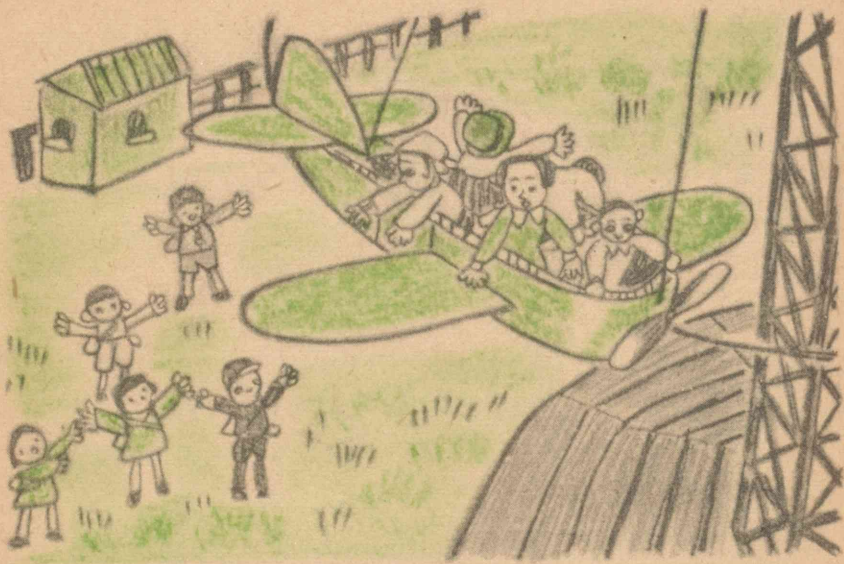
女一「大水が出た時、水があふれ出さないように、つくったのだと思います。」

女二「この前の大水は、川のていぼうがこわれたからだとい
うお話をききました。ていぼうというのは、このどて
のことですか。」

先生「そうです。川の両がわに、ていぼうがつくってあるの
は、水がいをふせぐためですね。」

五のばめん

すずしい風にふかれながら、土手の草原でおべんとうを食
べました。とよ子さんが、ふるしきづつみをひらいたひょう
しに、りんごがころがり出て、川の中へポコンとおちました。
とよ子さんは、あわてておいかけようと思いました。



みんなが、心配そうに見ていました。

先生は、

「あぶない、あぶない。先生が
とってあげましょう。」

といって、すぐひろってください
いました。

とよ子さんは、にこにこしながら
いただきました。

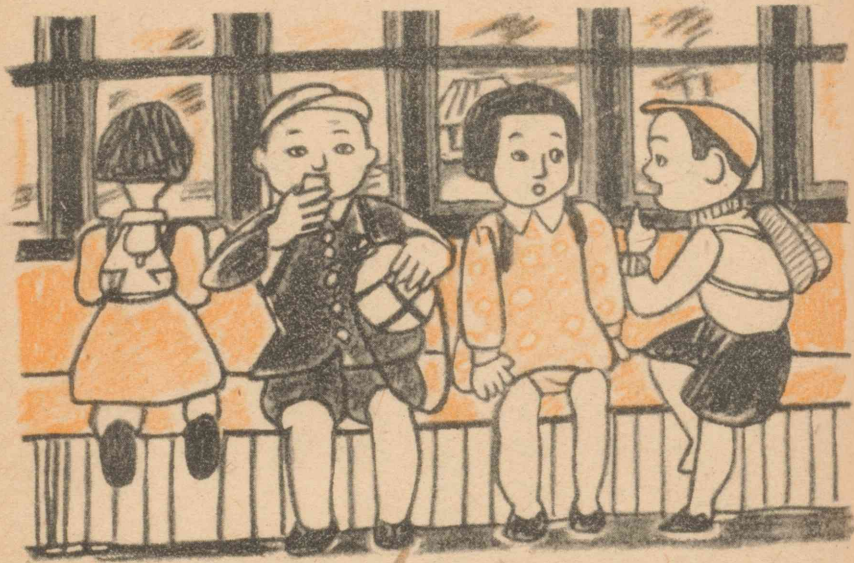
みんな、ほっと安心しておべ
んとうを食べはじめました。



六のばめん

中川えんに、はいりました。
まめ汽車、まめ自動車、波の
りボート、ひこいきなど、あそ
ぶものがいろいろあります。
グルグルまわるひこいきにのっ
た人たちが、下を見ながら大声
でさけんでいます。

男一「出発。——さよなら、さ
よなら。」



した。
んで、みんなのかおはまっか
電車のまどから夕日がさしこ
大よろこびです。

そばにいた人たちは、みんな

男ニ「ぼくにもね。」

男一「ありがたい、たすかった。」

てきたからあげるわ。」

女一「わたし、えきで水を入れ

男ニ「ぼくもからっぽだ。」

中川えんを出ると、すぐ電車のえきです。みんなそろって、
帰りの電車にのりました。
男一「のどがかわいてこまったな。水とうがからっぽだ。」

七のばめん

女一「行ってまいります。」
男ニ「わあ、世界一しゆうだ。はやい、はやい。」
男三「ひろい、ひろい海だ。」
男一「汽船がけむりをはいて走っている。」
女一「あ、まる山が見えるわ。」
女ニ「まあ、きれいだったこと。」

三　　るすばん

あきらさんたちの組では、お手つだいのことを作文にしました。みんなは、おつかい、にわはき、るすばん、たねまき、おもりなど、いろいろなだいで書きました。

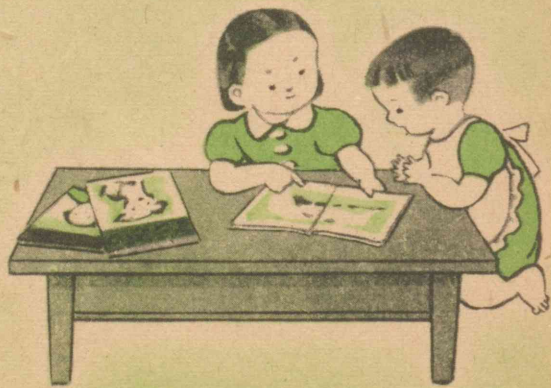
先生がごらんになって、

「ちよ子さんののは、るすばんというだいです。たいそうくわしく書いていますから、読んでみましょう。」
とおっしゃいました。

きょうは、おかあさんが町のおばさんのうちへいらっしゃったので、わたくしは、ひるからみっちゃんどふたりで、おるすばんをしました。
まだ、にいさんは学校から帰りません。うちの中は、しんとしています。

「みっちゃん、絵本を見ましよう。」

わたくしは本ばこから絵本を出してきて、みっちゃんどふたりで見ました。はじめは、のりものの絵本です。



「ほら、みっちゃん、汽車よ。シュツ、シュツ、シュツ。ポツ、ポツ、ポツ。汽車、汽車、走れ。」
わたくしが読むと、みっちゃんはよろこんで、
「きしゃ、きしゃ、はしれ。」

と、手をたたきながらいきました。その時、表の方で、

「ゆうびん。」

と、大きな声がしました。

「みっちゃん、ゆうびんやさんよ。行ってみましょう。」
わたくしはみっちゃんの手をひいて、げんかんへ行きま



した。ゆうびんやさんは、

「おとうさんにきていますよ。」

と、手紙をわたしてくれました。

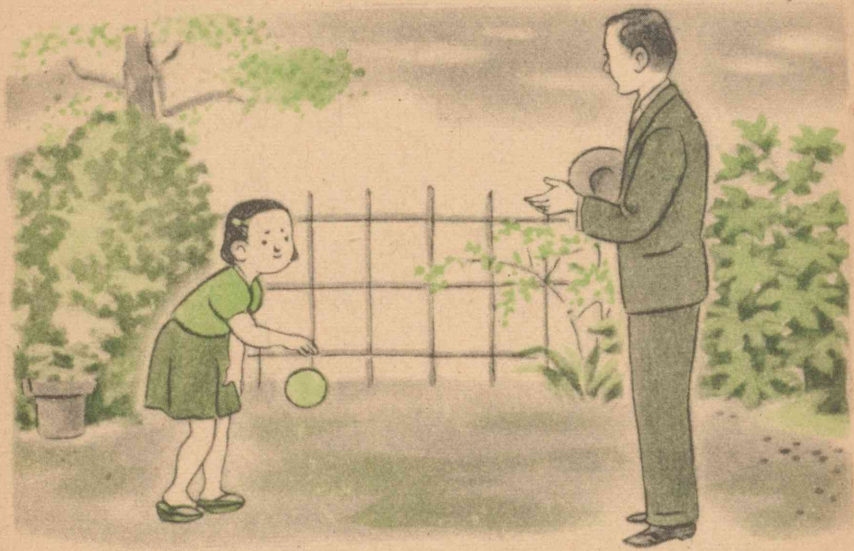
「はい、ありがとうございます。」

わたくしがおじぎをすると、みっちゃんもまねをして、お

じぎをしました。

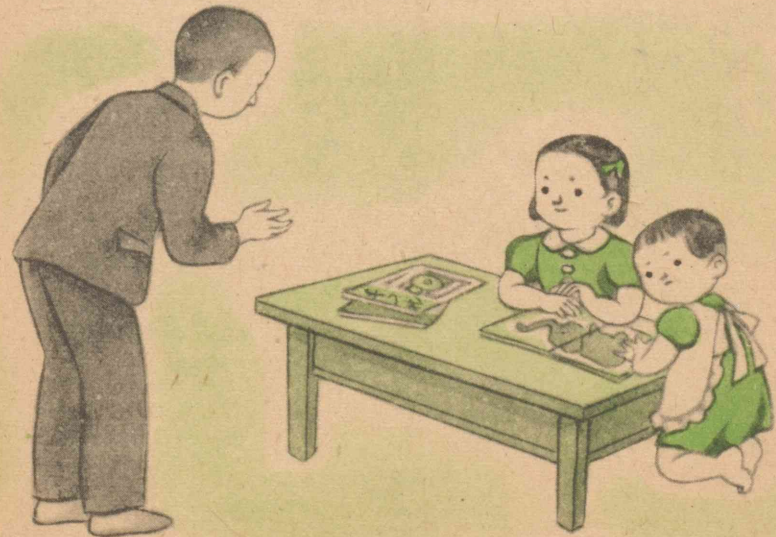
「おるすばんですか。いい子ですね。」

と、ゆうびんやさんは出て行きました。その手紙は、わたくしの大好きなおじさんからでした。



「おじさんからきたのよ。おとうさんがお帰りになったら、読んでいただきましょうね。」
 といいながら、わたくしは、手紙をおとうさんのつくえの上におきました。

こんどは、どうぶつの絵本を見ました。そのうちに中学校のいさんが帰ってきました。
 「ちよ子、ぼくがみっちゃんのおもりをするから、あそんで



おいで。」

「じゃあ、ちよつとあそんでくるわ。」

わたくしはまりを持って、外へ出ました。

わたくしがまりつきをしていると、

「こんにちは。」

といって、せいの高いよそのおじさんがはいつてきました。

「おとうさんは、かいしゃから

もうお帰りになりましたか。」

おじさんは、にこにこしながらききました。

「まだ帰りません。きょうはおそくなるそうです。」

と、朝おとうさんからきいたとおりにこたえました。

「では、おかあさんは。」

と、おじさんがまたききました。

「町のおばさんのうちへ行きました。夕方には帰ります。」

「おるすばんですか、かんしんですね。」

「おじさん、なにかご用ですか。」

「わたしは本町通りの木村です。また、夕方きましょう。おかあさんがお帰りになったら、そういつてくださいます。」

と、おじさんは帰って行きました。

わたくしはまた、まりつきを

してあそびました。

夕方、おかあさんが帰ってき

ました。わたくしが手紙の事と、

木村さんのいらっしやった事を

お話すると、

「ああ、そう。よくおるすばん

ができましたね。どうもあり

がとう。」

と、ほめてくださいました。



四 おたまじゃくし

あきらさんたちは、先生といっしょに、小川へさかなどりに行きました。えびや、ふなが、たくさんとれました。

学校へ帰るとちゅう、たんぼの水たまりで、まるいぶよぶよしたのを見つけました。

「おや、なんだろう。」

「なんででしょうね。あれは。」

と、みんなが口々にいいました。たかしさんが、

「あれは、きつとかえるのたまごだよ。」

と、いいました。先生がごらんになって、

「これは、どのさまがえるのたまごです。」

と、おっしゃいました。しげるさんは、そのたまごをあみですくって、バケツの中に入れました。みよ子さんたちが、

「まあ、きみがわるい。」

といいました。

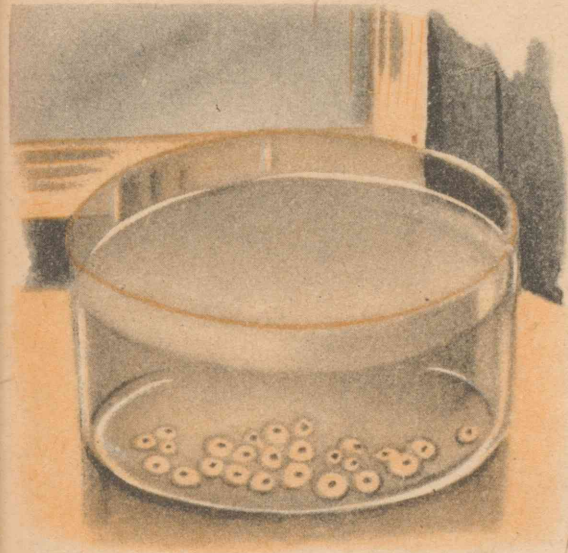
ぶよぶよしたものの中には、たまごがたくさんあります。

よく見ると、たまごはまんまるで、上の方が黒く、下の方が



白くなっています。

「このたまごも、学校へ持って行こうよ。」
と、あきらさんがいいました。



すると、みんなも、

「そうだ、教室の水そうの中で
かってみよう。」

といいました。

学校に帰ってから、えびやふ
なはいけにはなして、かえるの
たまごは、教室の水そうに入れ
ました。そして、あきらさんた

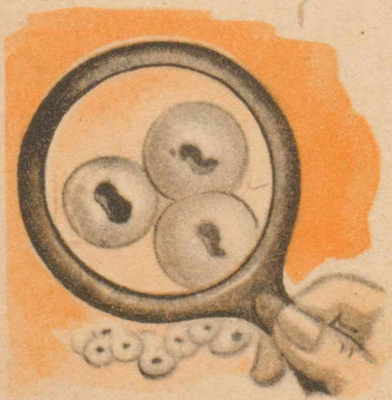
ちが当番になって、かんさつ日記をつけ
ることにしました。

五月五日

けさ見ると、きのうと違ってきたたまご
が、すこしほそ長くなっていました。

五月八日

たまごのまわりのぶよぶよしたものが、
いくらかとけはじめました。たまごは、
だるまさんのようなかたちになりました。



ぼくは虫めがねでのぞいて、しゃせいしました。先生が、
「じょうずにかけましたね。これからどんなふうにかわるか、
よくかんさつしましょう。」

とおっしゃいました。



五月十三日

きょう見ると、たまごは、水そ
うのそこでよこになっていました。
もう、ぶよぶよしたものからぬけ
出して、前よりもほそ長く見えます。

「おや、どうしたんだらう。」と思つて、ぼうでそつとさわ

と、ぴくぴくと動きまわりました。ぼくは
びっくりして、

「たまごが、おたまじゃくしになつ
たよ。」

と、大きな声でいいました。みんなは、

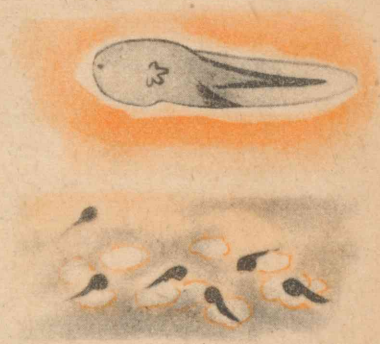
「ほんとうかい、ほんとうかい。」

と、いつて集まってきました。



五月十六日

おたまじゃくしは、もう一センチほどになりました。水そ
うのふちに、じつとすいついています。よく見ると、あごの



両がわから、毛のようなものが出ています。
先生におききすると、
「これは、えらとって、ここでいきをす
るのです。」
とおっしゃいました。

五月二十八日

おたまじゃくしは、もう二センチほどに
なりました。とても元気で、水そうの中を、
ぞろぞろおよぎまわっています。小川から
水草をとってきて、小石や土といっしょに



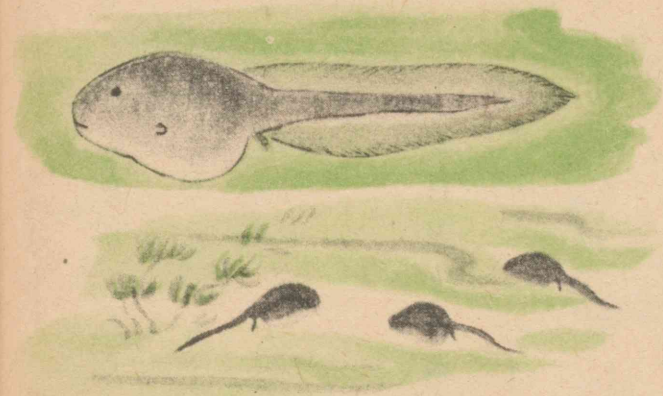
入れてやりました。時々、水草をつついたり、さかさになって、
その土を食べたりしています。おたまじゃくしのおなかに、
うずまきのようなものが見えます。これは、おたまじゃくし
のはらわただそうです。

五月三十一日

きょうも、たんぼから土と水をとって
きて、水そうの中に入れてやりました。
おたまじゃくしは、とても元気です。け
ずったかつをぶしをやると、みんなよろ
こんで食べます。



よく見ると、しっぽのつけねに、なにか黒いものが見えます。みよ子さんが、



「あれは、きっと足がはえてきたのでしょう。」

といました。先生もごらんになって、「もう、あと足がはえてきたのです。」

早いものですね。」

と、おっしゃいました。ぼくはうれしくてたまりません。早く大きくなって、かわいいかえるになればいいと思いましたが。

五 駅ではたらく人

(一) 駅ではたらく人

駅のホームは人でいっぱい。

そのあいだを駅の人が、にもつを山のようにつんだ車をおして行く。

一足、一足、足に力を入れておして行く。

あれはみんな貨車につみこんで、

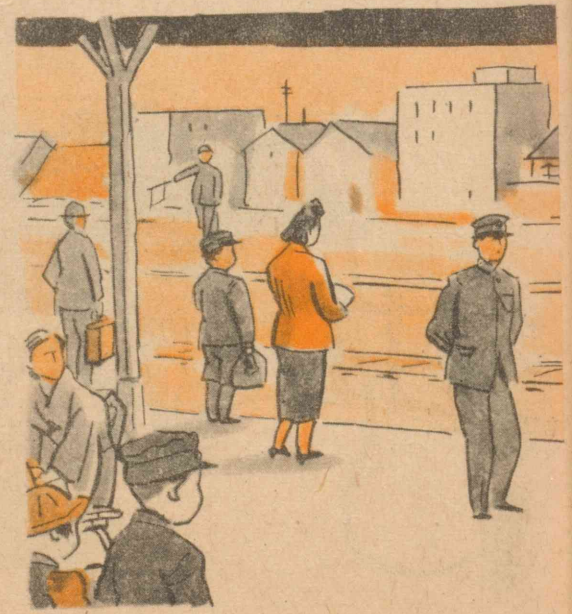
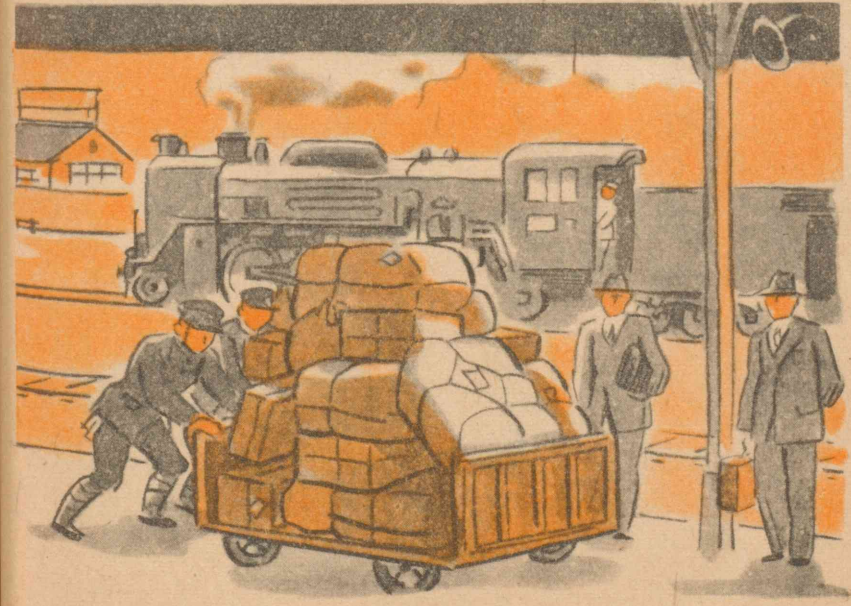
ほっかいどうや、きゆうしゅうへおくるのだらう。

シュウ、シュウ、シュウ、シュウ。
まっ黒なきかん車が、
風を切ってやってくる。
石炭をたく人がこつちを
見ている。

そのそばの人は、じっと
むこうを見ている。
赤はたと青はたでしんご
うする人、ゆっくり青は
たをふっている。
白いゆげをぱっぱと出

しながら、ゴウゴウとき
かんしゃはすぎて行く。
天じようのスピーカーか
ら、大きな声がきゆうに
ながれ出した。
せいの高い駅長さんが、
両手をうしろに組んで、
ゆっくりあるいて行く。
もうすぐ汽車がはいつてくるのだ。

(二) 牛

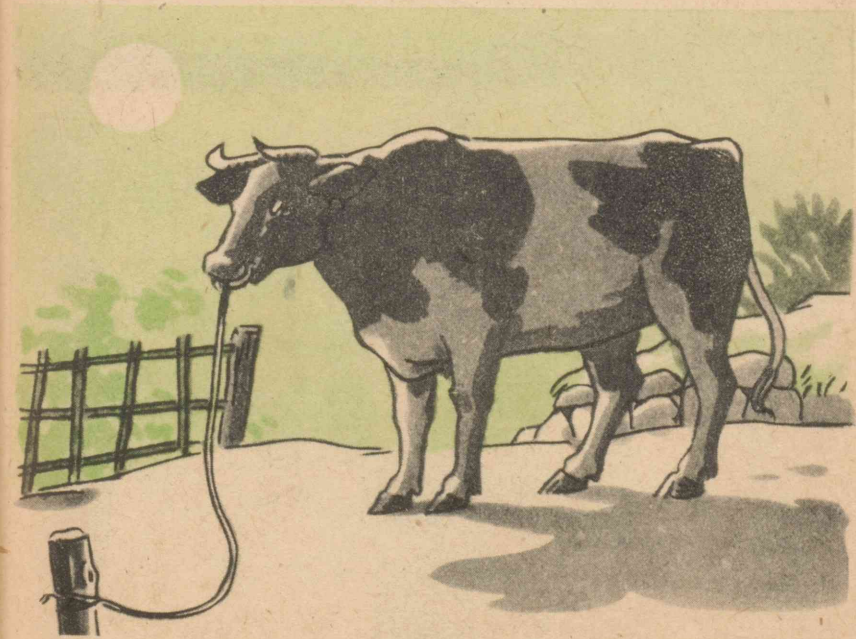


月にてらされながら
にわでやすんでいる牛。
きょうも一日はたらい
てきた牛。

考えごとでもするよう
に、ゆっくり口を動か
している。

ふどいつのが二本にゆ
つとまがっている。

つめの先がわれてかた
そうな足。



その足で大きなからだをさきさきえている。

ふどったはらは、いかにもつよそうに見える。

月が牛のせなかをてらしている。

牛の黒いかけが大きくじめんじめんにつつている。

まるでぼくが牛によりかかっているようだ。

牛はそんなことはちつとも知らぬかおで、

あいかわらずもぐもぐ口を動かしながら、しずかにやすん
でいる。

(三) 身体けんさ

みんなはだかだ。

はだかでにこにこしている。
おいしゃさんがふとい手で、
こつんこつんとぼくのむね
をたたく。
つめたいおいしゃさんの手
から出るひびき。
ぼくのむねのそこまでしみ
こむ。

「はい、よろしい。」

おいしゃさんがぼんど、

ぼくのせなかをたたいた。

ぼくはきゆうに元気になって教室を出た。

(四) 水くみ

うでに力を入れて、いど水をギイ、ギイとくみあげる。

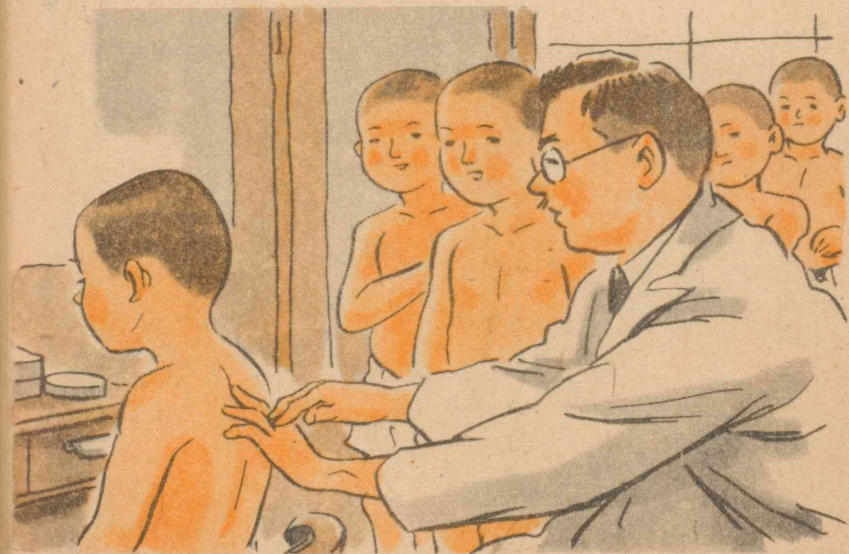
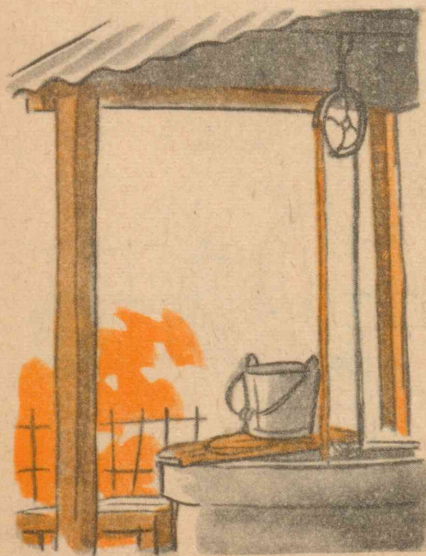
ふかいいどのそこからあがってくる水、

きれいな水だ。

地のそこからわき出したつめ

たい水。

水おけにぎあつとあけると、
まっ白な水のあわが生きもの
のようにもりあがってくる。

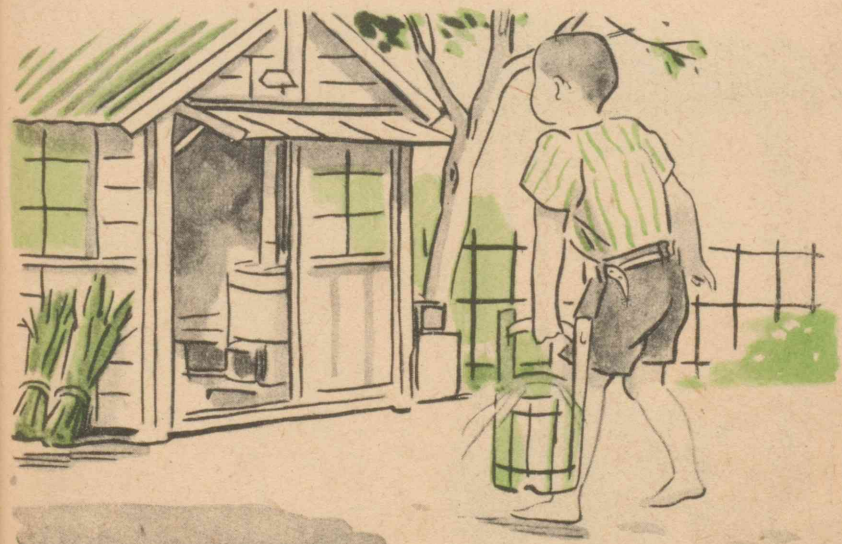


わたしはそれをふる場へ
はこぶ。

ぴちゃん、ぴちゃんと足に
かかってもへいきだ。

つま先に力を入れて、ふる
おけの中へどっとくみこむ
と、すきとおった水が、わ
になってゆれている。

いつのまにはいったのか、
青い木の葉がさかなのよう
にゆれていた。



六 つぎたし話

あきらさんたちは、つぎたし話をしてあそびました。

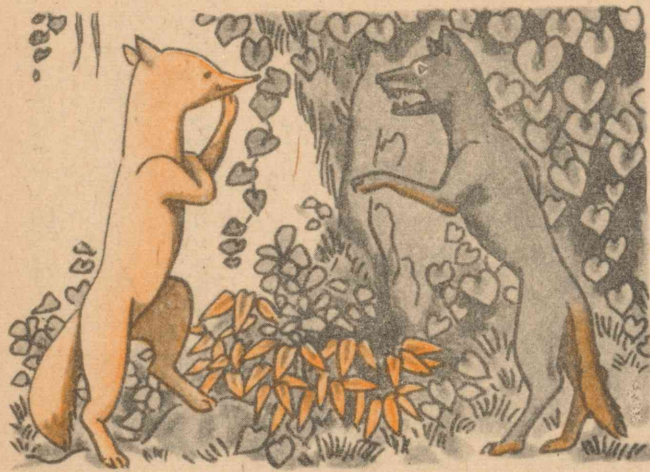
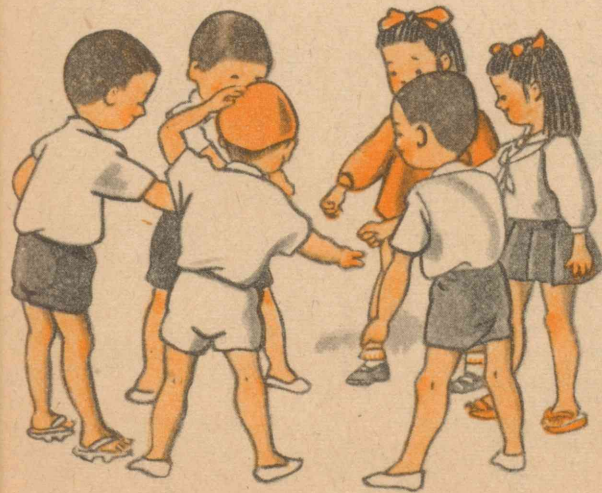
このあそびは、はじめにみんながじゃんけんをします。じゃ
んけんで負けた人が、じぶんで考えた話をします。そして、
話がおもしろくなってきた時、きゆうに話をやめて、だれか
の名まえをさします。さされた人は、その話にあうように、
話をつづけます。

そして、またとちゆうで、つぎの人をさします。こうして、
つぎつぎに、話をつぎたしていくのです。もし、話のつぎた

しができなければ、その人は負けになります。
つぎたし話は、いろいろにひろがって、ほんとうにおもしろいあそびです。

あきらさんたちは、まるくわになつてじゃんけんをしました。ふみおさんが負けました。ふみおさんは、しばらく考えてから話しはじめました。

「ある山おくに、おおかみときつねがすんでいました。おおかみは、世界中でじぶんほどつよいものはないといって、じまんしていました。」



ある日、きつねがおおかみに、『でも、村にいる人げんはもっとつよいよ』
といいました。
おおかみは、『では、その人げんというものにあってみよう』
といいました。
きつねとおおかみは、山をおりて村はずれにきました。すると、むこうから女の人がやってきました。

ここまで話すと、ふみおさんはきゆうに、

「よしこさん。」

と、名をさしました。よしこさんは、ちよつと考えましたが、すぐ話しつづけました。

「その女の人は、きつねとおおかみが立っているのを見て、びっくりしました。そして、もどきた方へ、どんだんにげて行ってしまいました。」

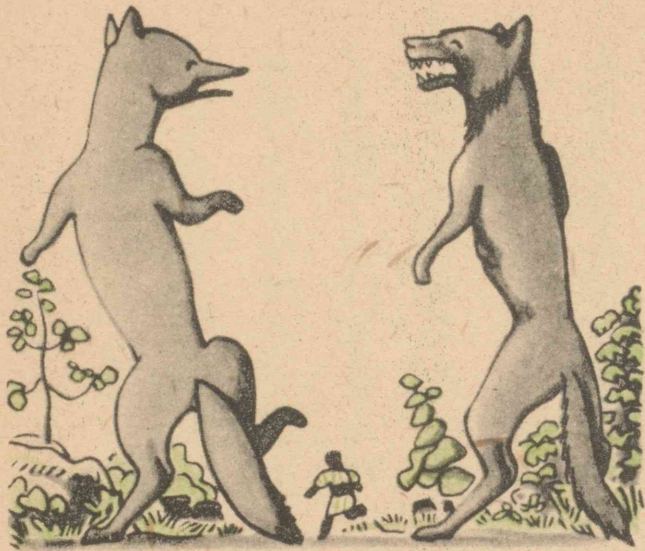
よしこさんはここまで話して、

たかしさんの名をさしました。たかしさんは、こまったようなかおをしましたが、

「ああ、そうだ。」

どいって、話をつぎたしました。

「おおかみは、『あはははは』とわらいました。そして、とくいそくに、『なんだ、人げんなんてよわいものだよ。ぼくのかおを見ただけで、にげてしまったじゃないか。』といました。すると、きつねが、『あれは、人



げんの中でもよわむしなんだよ。もう少し待ってみよう。』
といました。その時、むこうからものすごいものがやっ
てきました。ものすごいものが……。
たかしさんは、くすくすわらいながら、
「つぎは、しげるさん。」
と、名をさしました。

「ものすごいもの、ええと、ものすごいもの、あのねえ……。」
しげるさんは、話のつぎたしがで
きません。みんなは、

「さあ、ものすごいものよ。」
「早く、早く。」

「ものすごいものがきたよ。
とせきたてます。」

しげるさんは、目をつむって考え
ていましたが、とうとう話し出しま
した。

「ブツ、ブウと、トラックがやって
きたのです。すると、おおかみは
あわてて、『あれは、なんだい。』と、

きつねにききました。きつねは、すぐそばのあなの中にど
びこんで、かおを出しながら、『あれに、人げんが乗って
いるんだよ。』といました。おおかみは、ぶるぶるふるえ出



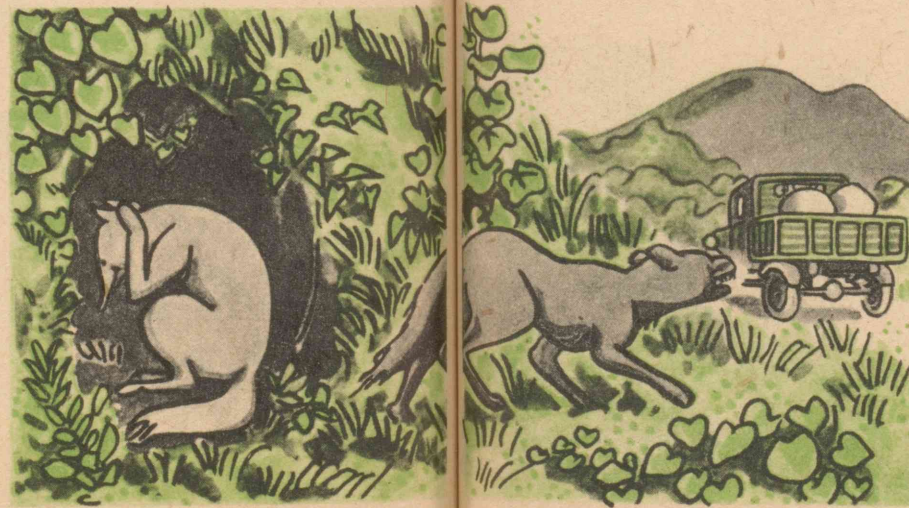
しましたが、やはりつよがって、『あんなもの、こわくないよ。ぼくが勝つにきまっているさ。』といいました。そのうち、トラックは、ものすごいスピードで近づいてきました。——おおかみはどうしたでしょう。さあ、つぎはみよ子さん。』

みよ子さんも、しばらく考えてからつぎました。

「おおかみは、トラックにむかって、『うう、うう。』と、ものすごいなり声をたてました。きつねは、あなの中でくびをちぢめていました。

そのうちに、あたりがしずかになったので、きつねがこわごわくびを出してみると、トラックはもう見えません。おおかみだけが立っていました。

『おおかみさん、どうしたの。』ときくと、おおかみはすましたかおで、『人げんなんで、ほんどによわいものさ。やっぱりぼくの勝ちだ。そばまできたが、ぼくのうなり声をきいて、にげて行ってしまったよ。』とこたえました。



——こんどは、あきらさん。」

「やあ、どうとうぼくのばんか。こまったなあ。」

あきらさんが、あたまをかいたので、みんながわらいました。まもなく、あきらさんは話しはじめました。

「きつねは、さつき、おおかみがぶるぶるふるえていたのを
思い出して、『それでは、もつと村の中へ行ってみよう。』と
いいました。」

『うん、行こう。どうせ、人げんなんてよわむしだから。』
おおかみはどくいそうに、こういって、きつねといっしょ
にあるき出しました。

すると、むこうから、『ブツ、ブウ』と、ラツパの音がきこ
えてきました。てんびんぼうをかついだ、とうふ屋さんが
きたのです。

——さあ、こんどはふみおさん。」

ひとまわりして、また、ふみおさんの番になりました。

「とうふ屋さんのラツパは、さびしそ
うにきこえました。もう、夕方です。き
つねは、山へ帰りたくなりました。」

その時、きゆうに、あぶらげのにおい
がしてきました。きつねは、はなをく
んくんさせながら、『ねえ、おおかみさ
ん、あの人げんのあとからついて行っ



てみようよ。とてもおいしいそうなにおいがするよ。』と
いました。

『うん、そうしよう。どうせ、人げんなんてよわいにきまっ
ているんだから。』

おおかみはこういって、とうふ屋さんのあとについて行き
ました。あたりは、だんだんうすぐらくなつてきました。

——こんどは、よし子さん。』

「しばらく行くと、あるいている人の
すがたがだんだん見え出しました。

きつねは、木や家のかげにかくれな
がらついて行きましたが、おおかみ
はへいきなようすで、大通りをある
いて行きます。

すると、むこうから元気のよい歌が
きこえてきました。子どもが五六人
手をつないで、歌を歌いながらやっ
てきたのでした。

——さあ、このあとはどうなるでし
ょう。こんどは、みよ子さん。』

みよさんは、考えこんでしまいました。みよさんは、
これから、どのように話をつぎたすでしょう。そして、この
話のおわりはどうなるでしょう。



七 さいしゅう

おとといの日曜日に、おじさんと、まる山へちよりのさいしゅうに行きました。

朝日川のはしのそばで、

ひらひらととんでいる、クロアゲハを見つけてきました。ぼくはむねがどきどきしました。ナミアゲハとキアゲハは、もう集めてあります。クロアゲハはまだです。いそいであみをふせましたが、クロア



ゲハは、すうっととんで行ってしまいました。

おじさんが、

「ちよつとあみをかして。」

といって、ぼくをあみを持って、だらだらざかをかけおりて行きました。

しばらくすると、



「あきら、いるよ、いるよ。」

という声がきこえました。

かけて行ってみると、おじさんはにこにこしながら、ぼく

の目の前に、あみをさし出し出しました。見ると、クロアゲハが、あみの中でぱさぱさと動いていました。

ぼくは、いたまないようにそうつとおさえました。あみから出してみると、大きなクロアゲハでした。はねがつやつやと光っていました。

「じょうずにとるね。」

と、おじさんがのぞきこみました。はねのすみの、赤いまだらがきれいでした。ぼくは三かく紙に入れて、ていねいにはこの中へしまいました。

「おじさん、ありがとうございます。」

ぼくは、うれしくてたまりません。おじさんにお礼をいいました。

すこし行くと、小さな池がありました。ふたりはそばの草原にすわってやすみました。

ぼくが、ふとふりむくと、

また、クロアゲハがいました。二ひきのクロアゲハが、ちらちらと道のへこんだところにあそんでいます。

「あ、またいるよ。」

あみをつかんで、ぼくはそこへとんで行きました。



きゆうに、うしろから小石がとんできて、ぱらぱらとちよ
うの近くへ落ちました。ちようは、ひらひらと高い空へとび
あがってしまいました。

「あ、おいしいことをした。」

ぼくはおどろいて、おじさんの方を見ました。おじさんは、
「ははは……。」

と、大きな声でわらいました。

せつかく二ひきもいたのに、なぜおじさんは、あんなこと
をしたのだろうかと思いました。

「さあ、出かけよう。あきららは、ちようをいじめにきたのか
い、さいしゆうにきたのかい。」

おじさんは、きゆうに立ちあ
がって、さつさと、まる山の方
へあるいて行きます。

ぼくは走っておいつきました。

「こんどは、いよいよ、アオス
ジアゲハだ。アオスジアゲハ
が待っている。」

おじさんが、ひとりごとのよ
うにいました。



「あ、そうだ。さつきのクロアゲハは、とらないでよかった。
ぼくは、そっと、はこの中のクロアゲハをのぞいてみました。」

ハ ぼくのヨット

(一)



ぼくは船がすきです。船の中でも、三かくのほをはり、白い波をけて走るヨットが大すきです。

この前の日曜日に、きよしさんがあるそびにきたので、ヨットを作ることにしました。

はじめ、ふたりでヨットにする木をさがしましたが、なかなかいいのが見つかりません。そのうちに、きよしさんが、

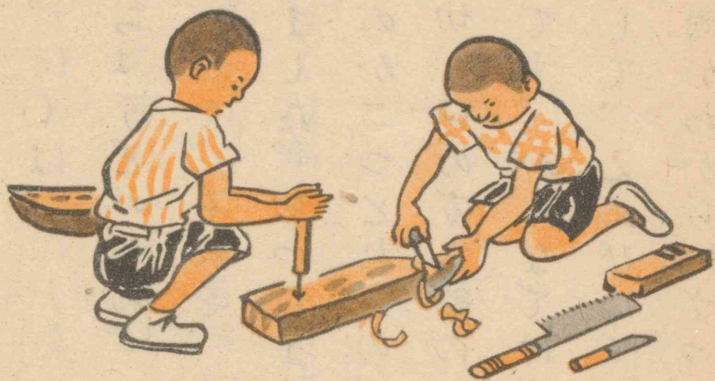
「これで作ろう。」

といって、うらの方から、ほそいまるたを一本持ってきました。ぼくは、

「ちようどいいね。」

といって、それを、のこぎりで二十センチぐらいの長さに切りました。切ったまるたを、たてに半分にわりました。同じものが二つとれたので、一つずつ作ることにしました。

切り口の方を船のかんぱんにして、まるい方をそこにします。かんなでけずって、かんぱんをたいらにしました。そして、えんぴつで船の形をかきました。それから、へさきを両がわからけずってとがらせ、ともの方はまるくしました。



「両がわをおなじようにけずらないと、かたむいてしまうよ。」
いつのまにそばへきたのか、にいさんが、そういって、すこしなおしてくれました。
こんどは、ほばしらを立てるので、おかあさんに竹のはしをもらってききました。かんぱんのまん中へんにあなをあけて、竹のはしを立てました。

ほばしらが立つと、いかにも船らしくなりました。ぼくもきよしさんも、うれしくなっていて、早くほをはって、水の上にかべたくなりました。

白と赤の小ぎれをもらって、ほの形に切りました。白いのはぼく、赤いのはきよしさんのにしました。きれの上と下に、竹のはしをぬいつけるのは、なかなかむずかしいので、いさんに手つだってもらいました。

いよいよ、ほをとりつけるのです。右左に動くようにして、ほばしから船のへさきとともへ糸をはって、ほをとりつけました。

「できた、できた。」

ヨットを持ってかけ出そうとすると、にいさんが、

「かじをつけなければだめだよ。」

と行ってわらったので、かじを作ることにしました。

うすいいたに、かじの形をかいて、

のこぎりと小刀で作りあげました。

ともにあなをあけ、かじのぼうをと

おして、どちらへもまわるようにし

ました。

たらいに水を入れて、ヨットをう

かべてみると、ヨットはよこにかた

むいて、たおれそうになりました。

「船のそこが、まるいからたおれる

んだよ。そこに、おもりをつけてみよう。」

にいさんはこういって、ほそ長い鉄のいたをつけました。

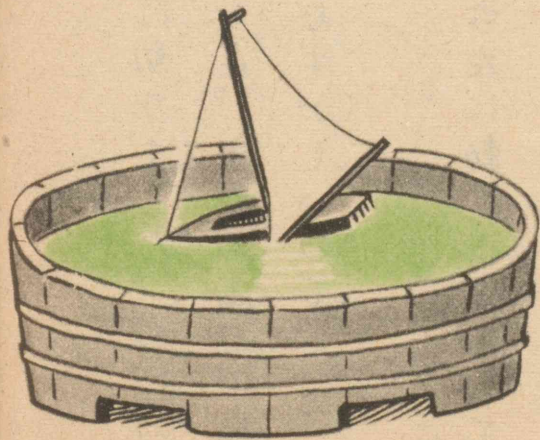
こんどは、すこしもかたむきません。

きよしさんが、

「船に名まえをつけようよ。」

といたので、三人で名まえを考えました。ぼくのヨットは、
ほが白いので、「かもめごう」、きよしさんののは赤いので、「日の
出まる」という名まえに決めました。そして、船のよこに、す
みではっきりと名を書きました。

(二)



ぼくときよしさんは、ヨットを持って家を出ました。にいさんも、ここにこしながら一しよにきました。

川へヨットをうかべに行くのです。

どちゆうまでくると、友だちが集まってきた。

「いいなあ、ちよつと見せてくれよ。」

「だれが作ったの。ぼくも作りたくなあ。」

などと、わいわいいいながらついできました。

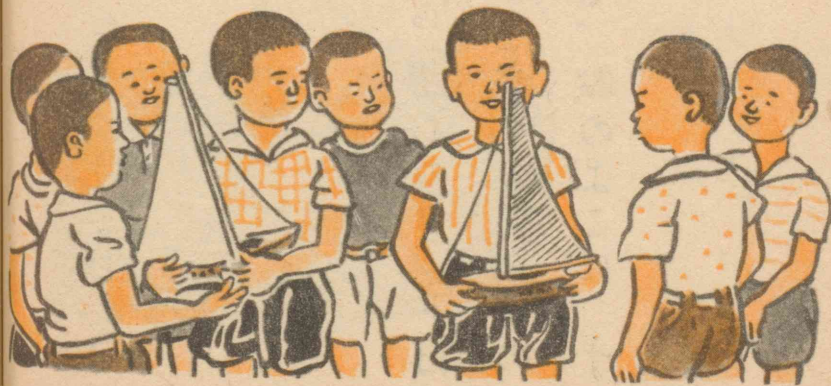
いつのまにか、みんなかけ出して川につきました。

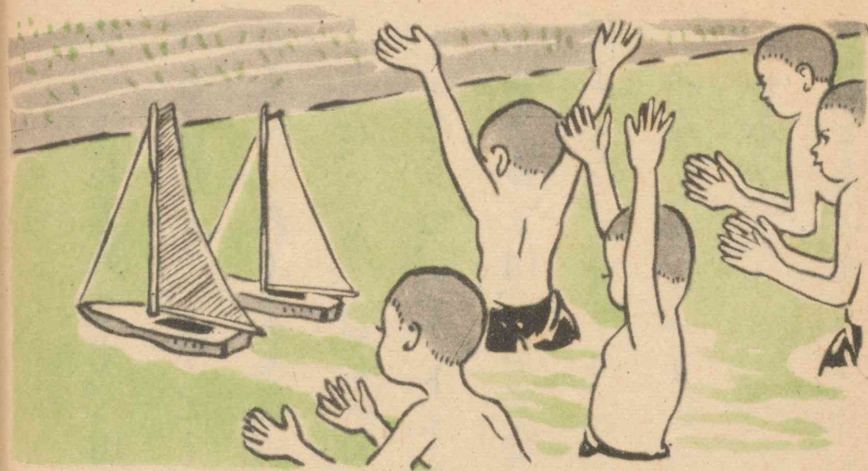
いいお天気です。川の水はきらきらと光っていました。あちらこちらで、子どもが大ぜいおよいでいます。ぼくたちも、およくしたくをして、ヨットを持って川の中へはいつて行きました。

ふたりは、ヨットを水にうかべました。「かもめごう」と「日の出まる」は、白と赤のほを水にうつして、ゆったりとうかびました。

みんな、
「わあっ。」

と声をあげました。





九 夏のおたより

(一) 海から

てるおくん、お元気ですか。ぼくと妹は、おじさんと一しょに海へきました。家から海までは百メートルぐらいなので、毎日およぎに行きます。ぼくはもう二十メートルぐらい、クロールができるようになりましたが、妹はまだやっとうぐだけです。

朝早くおきて、地びきあみを見に行きます。大ぜいの人が

その時、すずしい風がふいてきたかと思うと、ヨットはきゆうに動き出しました。見る見るうちにはやさをまして、水の上をすべるように走って行きます。

ぼくも、きよしさんも、思わず、

「ばんざあい。」

とさけびました。

みんなも、

「ばんざあい。ばんざあい。」

と手をたたきました。

「エンヤ、エンヤ。」と声をそろえて、元氣よくあみをひきます。ぼくもこのごろは、一しよにひいています。あみがあがると、あじやいわしがぴちぴちはねて、とてもおもしろいものです。

妹はめずらしいかいがらをたくさん集めています。ぼくは、海のけしきをしゃせいしたり、船のもけいを作って、海にうかばせたりしてあそびます。



帰るまでには、まっ黒なかおになって、きみをびっくりさせようと思っています。さようなら。

七月三十日

あきら

てるおくん

(二) 山から

おとうさん、おかあさん、おかわりありませんか。このあいだおかあさんがお帰りになった時は、すこしさびしいと思いました。おじいさんや、おばあさんがやさしくしてくださるので、毎日たのしくくらししています。

まだ、朝日ののぼらないうちにおきて、つめたいいど水で

かおをあらいます。それからけんちゃ
んたちと、山へ草かりに行きます。

うさぎのえさにするのです。やぎを
つれて、草をたべさせに行くことも
あります。

きのうは、きれいな山ゆりの花を
とりました。手のとどかないような
がけの近くにたくさんありました。
いまにもさきそうな大きなつぼみの
ついたのを五本とりました。けさ見



たらもうひらいて、へや中いいにおいがしていました。

おじいさんが、どぞうから出してくださったつくえで、べ
んきようしています。もうお友だちもできて、たのしくあそ
んでいます。

うさぎが、もうすぐ子どもをうむそうです。にわとりも、
毎日たまごをうむので、とりに行くのがたのしみです。
では、おとうさんおかあさんお元気で。さようなら。

八月二日

よし子

おとうさん
おかあさん

(三) 町から

おかあさん、ぼくたちは、ぶじにこちらへつきました。はじめに汽車に乗ったので、ぼくはうれしくてたまりませんでした。けれどもあまり長いので、おしまいにはすこしつかれました。汽車からおりるとほっとしました。かいつつ口におばさんのかおが見えた時は、ほんとうにうれしく思いました。おみやげのやさいやくだものを出すと、

「まあ、めずらしい。」

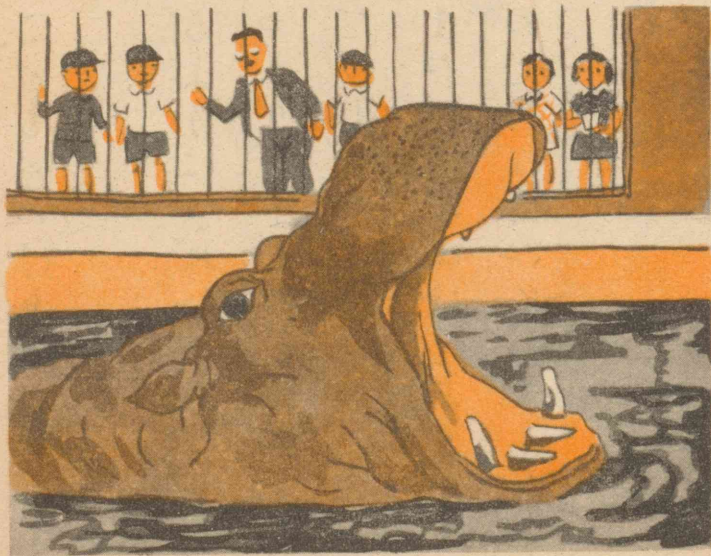
と行って、みんな大よろこびでした。

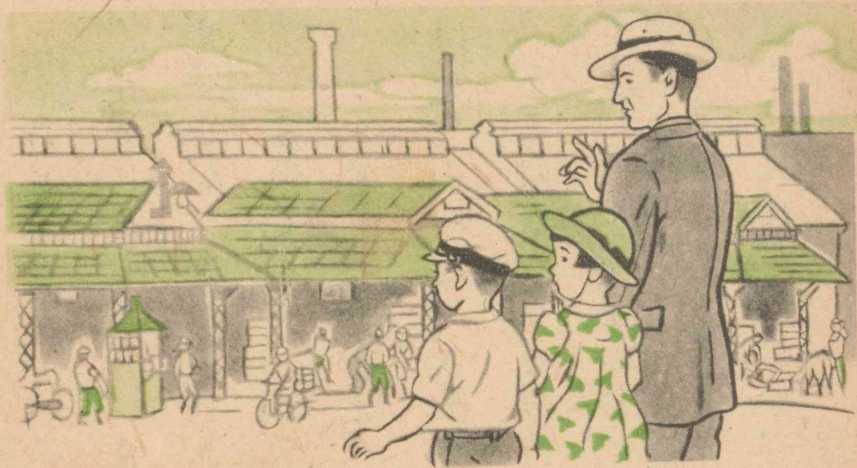
きょうは、おとうさんと町をけんぶつしました。日がかん

かんとてりつけて、いなかよりあつまいような気がしました。あるく人もずいぶん多いのでおどろきました。

電車の中も、人がいっぱいです。自動車もたくさん通るので、ぼんやりしているとあぶないようです。

いちばんおもしろかったのは、どうぶつえんでした。ぞうはいませんでしたが、口の大きなかばや、こわそうなわにや、せな





よく晴れた日曜日の朝早く、ちよ
子さんはおとうさんと家を出ました。
町の魚市場を見に行くのです。どちゅ
うであきらさんをさそって、魚市場
行の電車に乗りました。
しゅうてんで電車をおりると、す
ぐ前に大きなたてものがあります。
「あれが魚市場だよ。」

十 魚市場

おかあさんへ

八月七日

たかし

かにこぶのあるらくだなど、見たこともないけものや、めず
らしい鳥がたくさんいました。
デパートにはいると、目のさめるようにきれいなしなもの
が、たくさんならんでいるのでびっくりしました。おとうさ
んに、本やおもちゃを買っていただきました。

あと五日ほどしたら帰ります。まだお話が山ほどあります
が、帰ってからにしましょう。たのしみに待っていてくださ
い。

と、おとうさんがいいました。

市場に近づくと、長ぐつをはいた人が大ぜい集まっています。さかな屋のおじさんたちが、方々からさかなを買いにきています。

ちよ子さんたちは、いちばんはじめにまん中のたてものはいりました。さかなのにおいが、ぷんぷんとおっぴょんてきました。そこはさかなを分けるところです。さかな屋のおじさんたちが、大声でさかなをかぞえたり、はこに入れたりして、いそがしくはたらいていました。

ちよ子さんたちは、おもしろそうに、そのようすを見ていました。

おとうさんが、

「ちよっとここで待っていて。

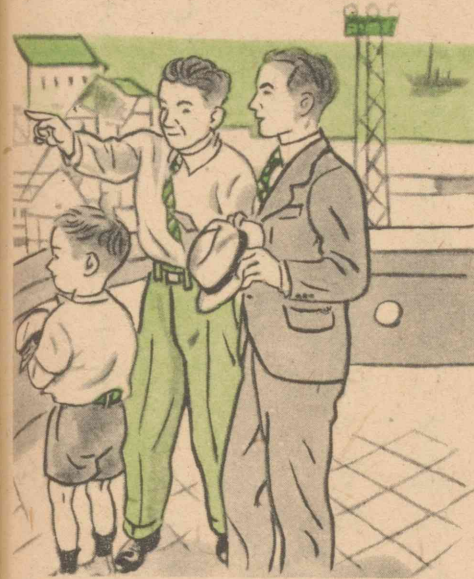
いま、市場のおじさんにおねがいしてくるから。」

と、おとうさんの方へ行きました。

「やあ、いらっしやい。魚市場の見学ですね。市場にはいろいろ見るものがありますよ。はじめに、屋上へあがってみましょう。」



おじさんは、にこにこしながらいいました。
おじさんにつれられて、三人は市場の屋上へあがりました。
「海だ、海だ。船がたくさんいるよ。」
あきらさんが大きな声でいいました。



市場のうらは海で、船がたくさん集まっています。どの船も、目じるしのはたを立てています。

おじさんは、その船をゆびさしながら、

「あれは、さかなをとる船や、

運ぶ船です。

ほら、あそこにさかなをおろしている船があるでしょう。」

といいました。

見ると、五六人の人が、大きなさかなを船からおろしています。

あきらさんとちよ子さんは、
ねました。
わかるがわるおじさんにたず

「おじさん、いまおろしているのは、なんといいさかなです

か。

「あれはまぐろです。とおい南の海からとってきたのです。」

「おじさん、むこうの大きなたてものはなんですか。」

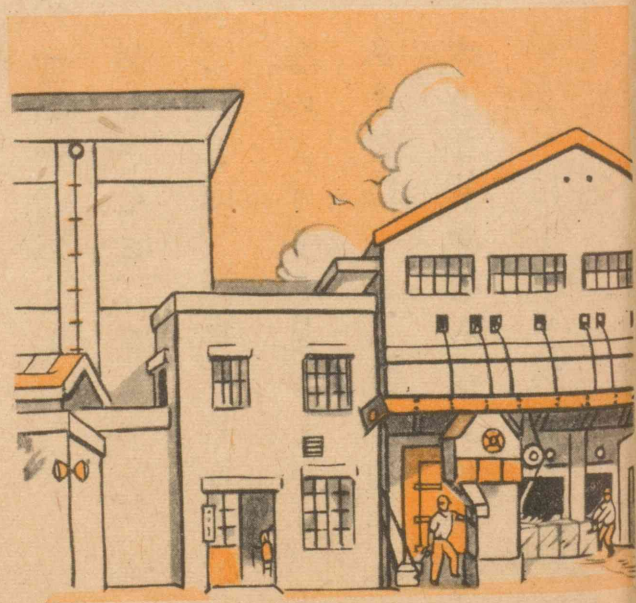
「あれは、こおりをつくる工場です。」

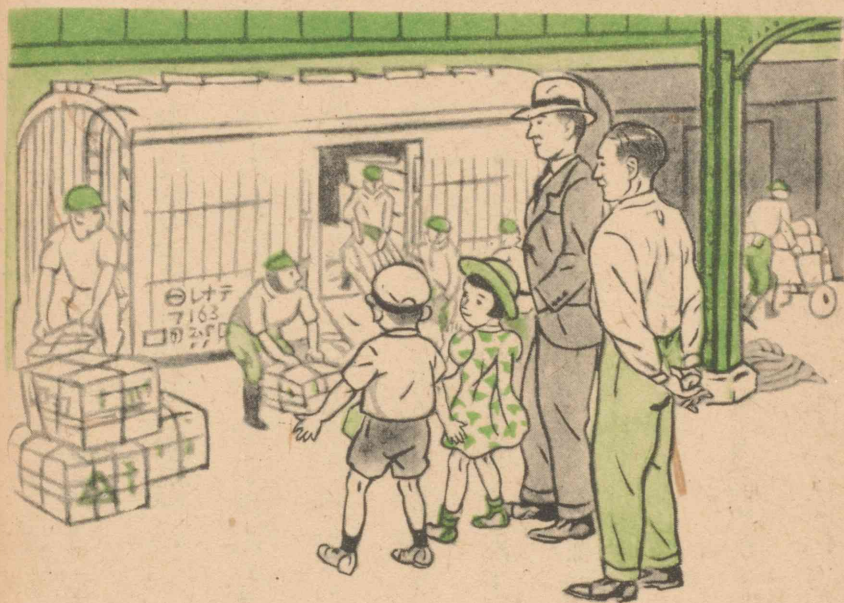
「こおりをつくって、どうするのですか。」

「さかなをとおい海から運んでくる時、そのまま船につみこむと、くさってしまいます。それで、あの工場で

つくったこおりをつかうのです。さかな屋さんのはこの中にも、こおりがはいっていただけでしょう。ごらんなさい。いまこおりぐらから、こおりをどんどん運び出しています。さかな屋さんも、船のおじさんも、あれをつかうのです。」

おじさんの話をききながら、三人は海のけしきをながめました。かもめが、すいすいとんでいます。とおくの小さな島





の上には、まっ白なにゆうど
う雲がわき上っていました。
しばらくして、また、市場
の一かいにおりました。

おじさんは、

「こんどは、汽車でくるさか
なのようすを見ましよう。
あそこに、まっ白にぬった
大きな貨車があるでしょう。
いま、にもつをおろしてい
るから、そばへ行つてよく

見ましよう。」

と、いきました。

貨車に近づくと、さあっとつめたい風がかおにあたりまし
た。

「ああ、すずしい。」

あきらさんが声をたてると、おじさんは、

「これは、れいとう車といって、さかなを運ぶ貨車です。こ
んなにあつい日でも、そばへよるとさむいくらいでしょう。
さかながくさらないようなしかけになっているからです。
どんなさかながあるか、よく見てごらんささい。」
と、いきました。

れいとう車から、どんどんにもつをおろしています。はこにはいったいかも、こもにつつまれたひらたいさかなも、みんなこちこちにこおっていました。

ちよ子さんが、

「へんなおさかなね。」

というと、おじさんが、

「これはかれいです。おいし
いさかなですよ。」

といました。

とおい北の海でとったのを、汽車でこの市場へ運んできたのだそうです。

「さあ、市場へくるさかなには、船でくると、汽車でくるのと両方あることがわかったでしょう。こんどは、市場からみなさんのところへどんなふう
に運ばれて行くか、しらべてみましょう。」

といて、おじさんは、トラックのならんでいるところへあんないして行きました。

さつきさかなを分けていたおじさんたちが、さかなのいっぱいはいったはこを、どんどんトラックにつみこんでいます。





おじさんは、

「もう、お話しなくてもよくわかる
でしょう。このトラックで、さか
な屋さんに運んで行くのです。」

と、いいました。

ちよ子さんたちは、毎日食べるさ
かなが、どこからどうしてくるのか、
よくわかりました。

おとうさんが、

「どうだ、おじさんのお話で、魚市
場のようすがよくわかったらう。」

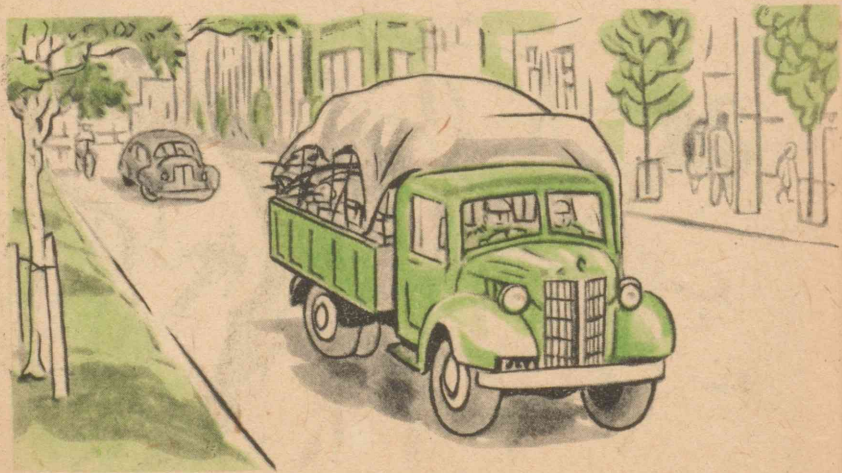
一ぴきのさかなも、このように

大ぜいの人々のおかげで食べら
れるのだよ。おとうさんも、た

いへんよいべんきょうをしたよ。」

と、いいました。

おじさんにお礼をいって、三人
は魚市場を出ました。さかなをいっ
ぱいつんだトラックが、日のかん
かんでっっている道を、なんだいまも、
なんだいまも走って行きました。



十一 帰る鳥くる鳥

(一) 帰るつばめ

秋のひがんも近づいて、やなぎのかれ葉はほろほろとちっていました。つばめのなかまは、チイチイないていました。

「さあ、出かけよう。南の島へ。」

「山をこえよう。海をわたろう。」

「日本の国は長いよ。どこまで行っ

ても、山々がつついてるよ。」

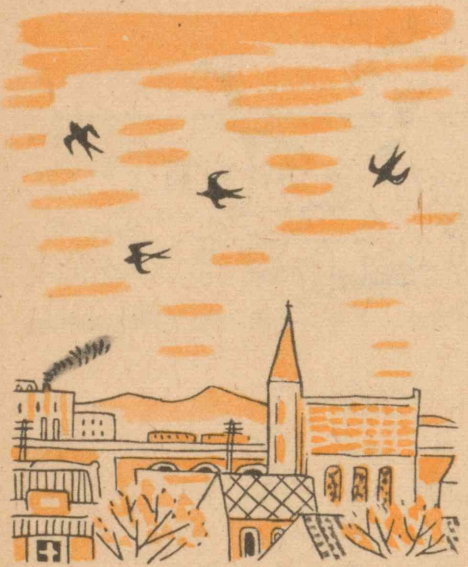
「けれども、春には、ふもとやみねに、白いさくらがつついてる。あれは、たいそううつくしいね。」

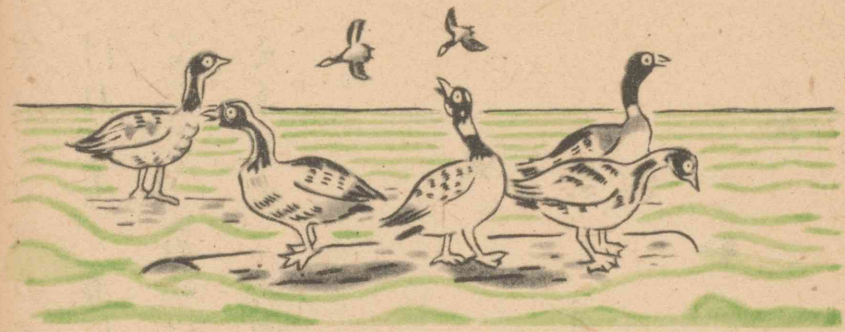
「そうとも、あれはみごとだよ。春には早くまたこよう。」

「そうとも、みんなでまたこよ

う。」

つばめのなかまは、ひらりひらりとどびたちました。チイチイないて、町のつばめは、町をはなれて行きました。村のつばめも、村をはなれて行きました。





(二) とんでくるがん

つばめが帰ると、がんがきます。

北の国から、海をわたってくるのです。な
んばもそろってとんできます。くるとちゆ
う、海の上に、流れ木が流れていました。

がんはその木につかまって、しばらくはね
をやすめました。しばらくやすんでとびた
つ時に、一わのがんがいました。

「この木を持って行きましょう。」

「どうしてですか。」

と、なかまのがんがきました。

「海はまだまだひろいのです。はねが、またつかれた時、こ
の木がなくてはこまりました。」

「その心配はいりません。波の上でもやすめます。また、べ
つな木も流れているでしょう。」

と、なかまのがんがいました。

「なるほど、そういうわけですね。」

がんのなかまは、とびたちました。頭の上は、青い空です。
目の下は、ひろい海です。

さおになったり、かぎになったり、れつの形をかえながら、
がんは、なかよくならんとんで行きました。

十二 ふしぎな森

(一)

家のように大きな木が、森の中に立っていました。
ある日、三べいが、その木の下にきていました。
「木なんてだめだ。大きくても、ものもいえない。」



すると、どうでしょう。木の上の方で、かすかな声がきこ
えだしました。

「あれっ。」

おどろいて、三べいは耳をかたむけました。風がふいて、
木が歌を歌いだしたのです。

「だって、だめだ。動けないじゃないか。」

三べいがいいました。

すると、こんどはえだが、ゆらりゆらりとゆれだしました。大きな風がふきだしたのです。

「やっぱりだめ。この森から出られないじゃないか。」

と、三べいがいいました。その時、ふといその木のみきから、声がきこえてきました。

「それでも、三べいさん。わたしは、ここにこうして、九十年立っているのですよ。あなたにできますか。」

「九十年。」

三べいは、びっくりしていいました。



「そのあいだに、五ども六ども、おそろしいかみなりが落ちてきました。風にふかれ、雪につもられ、えだも、みきも、

おれそうになることは毎年のことですよ。」

三べいはかんしんしてしまいました。見あげれば高さ十メートル。なにより、このかしの木がえらいように思われました。

森のかしの木の上で、一羽の小鳥がなっていました。これをきいて、かしの木が三ぺいにいいました。

「三ぺいさん、小鳥のことばがわかりますか。」

「わからないよ。」

と、三ぺいがいいました。

「お天気でうれしいが、おなかですいててくるしいな。おいしい小虫が、たべたいよ。」
かしの木がこういって、小鳥の



ことばを教えてくださいました。

「おうちに行つて、食べればいいじゃないか。」

三ぺいがいいました。

「そのおうちが、ないのですよ。」
かしの木がいいます。



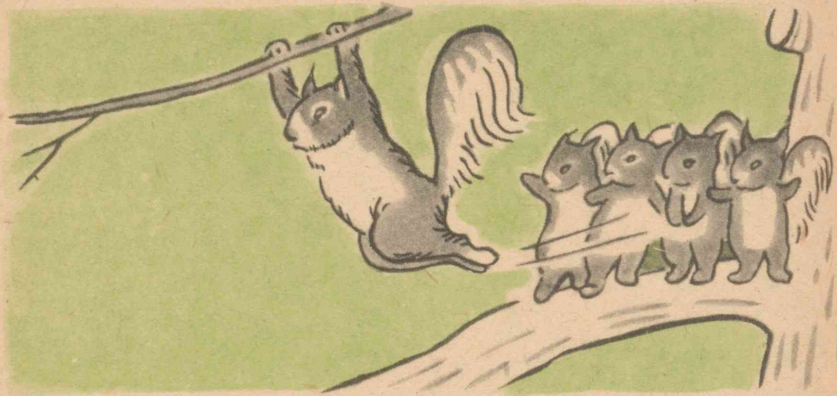
「では、おとうさんやおかあさんは。」

と、三ぺいがききますと、

「そのおとうさんも、おかあさんも、ないのですよ。」

かしの木がいいます。

「かわいそうな小鳥。」



三ぺいが森に行くと、ふといえだに、
たぐさんのりすがならんでいました。一
ぴきの大りすが、そばのほそいえだにぶ
らさがって、ぶらんこをしているところ
です。
えだがゆれて、むこうに行くと、その
りすは手をはなして、ぴよんととんで、
二メートルもある、とおい木のえだにと
びつきました。

(三)

三ぺいは考えながら、うちに帰り、おとうさんにおねがい
して、小鳥のすばこを作ってもらいました。
それをかしの木のえだの上におきました。その前に小ざら
をおいて、米つぶを入れました。
あくる朝のこと、三ぺいが行っ
てみますと、小鳥は、そのすばこ
にとまって、にぎやかに歌って
いました。
「おうちもできた。ごはんも食べ
たと、いっているのです。」
と、かしの木が教えてくれました。



するとこんどは、小さなりすが大りすのまねをして、ぶらんこをやりました。

「ちっちい、きっきい。」

大りすが、ひょうしをとりました。ぴよんととんだのです。ところが、小りすは、むこうの木につかまりそこねて、「ききき」と、なきながら落ちかけました。

それを見ると、大りすが手つだって、上にひきあげました。

二ひきは、むこうのえだにならびました。つぎの小りすが、ぶらんこをはじめ

「ちっちい、きっきい。」

これを見て三べいは、かしの木にききました。

「りすが、木わたりのけいこです。」

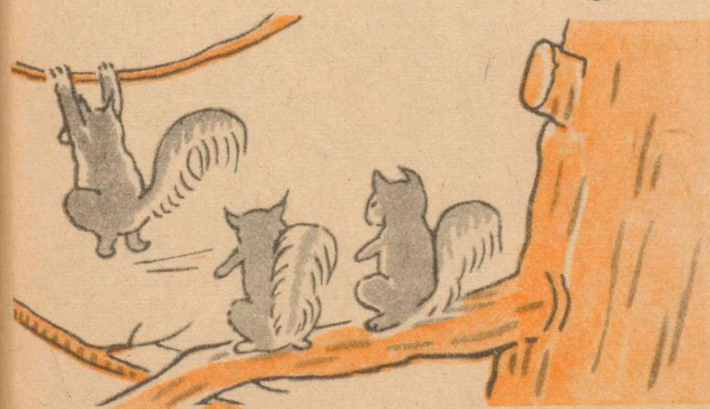
かしの木がいました。

「おもしろいなあ。ぼくもしてみたい。」

「いえいえ。あれは、たのしみではない

のです。木のみを食べるためですよ。あなたが学校に行く
のとおなじですよ。」

かしの木が教えてくれました。



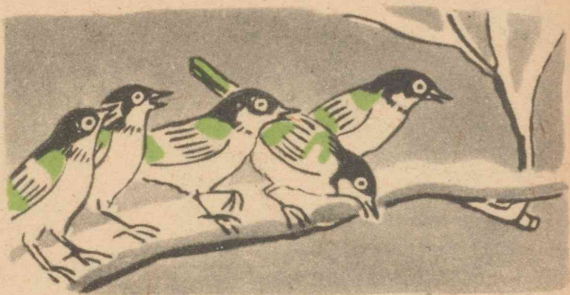
雪がふりました。森はまっ白になりました。

三ぺいは、ゴムのぱちんこを持って、出て行きました。森の小鳥をうとうとというのはのです。

小鳥は、さむさにふるえていました。

えさがなくて、おなかもすいていました。

「ちゅうちゅう、さむい。ちゅうちゅう、おなかですいた。」



小鳥たちはえだにならんで、からだをくっつけあって、こんなふうになっていたので。そこへ、三ぺいがやってきました。それを見ると、一わの小鳥がいました。

「いたずらっ子がやってきた。いたずらするから用心しなさい。」

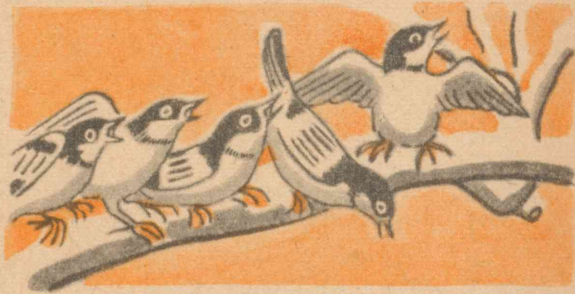
もう、ばたばたにげようとするものがありました。

三ぺいはそつと行って、小鳥の近くの木のかげにかくれました。そこから、ぱちんこのゴムに石をはさんで、じっとねらいをつけました。

ところが、その時です。上のえだから、ぱさりと雪が落ちてきました。

雪は、三ぺいの頭の上にかかりました。これを見て、小鳥たちはどんなによろこんだことでしょう。

口で、「ちゅうちゅう」。はねで、「ばたばた」。



「雪さん、ありがとう。えださん、すみません。わたしたちはたすかりました。うれしい、うれしい。」

けれども、三ぺいは、うちに帰っておかあさんにいいました。

「ぼく、雪は大きらい。」

すると、おかあさんはいいました。

「それは、おまえがいけません」

どうしてでしょう。わかりますか。

大風のふいている日でした。三べいは森に出かけました。

森のかしの木や、りすや、小鳥が、どうしているか、見ようと思ったからです。

森では大へん風の音がしていました。

木という木が、一方におしまげられて、

「いたい、いたい。」

ど、なっているように思われました。けれども、その中で、かしの木ばかりは、しっかり立っていて、

「負けるな、負けるな。」

ど、ほかの木にいつているように見えました。

「かしの木さん、つよい、つよい。」

三べいがいました。

「九十年、風とすもうをとってきたのですもの。」

かしの木がいました。

その時、見るとかしの木のえだのかげに、五ひきも十ひきも、小鳥が集まって、風をよけてとまっていました。



また、一方のえだのかげには、りすが、たくさん風をよけて集まっていますか。

「どうですか。」

かしの木がいいました。

「小鳥はとび、りすははねています。けれども、はねることもどぶこともできないわたしに、いまはこんなによっています。はねたり、とんだりすることばかりが、えらいのではありません。」

三、ぺいは、かんしんしていいました。

「かしの木さん、わかりました。ぼくも、あなたのような人げんになります。」



おけいこの手びき

一 空

- (1) 空を見て、どんなことを考えたでしょうか。みなさんは、どう思いますか。
 - (2) さくらのどては、だれがつくったのですか。いまはどうなっていますか。
 - (3) 学校の行き帰りに、どんなきもちで、さくらのどてを通りますか。
- #### 二 えんそくの紙しばい
- (1) あきらさんたちのえんそくは、どんなところが、おもしろかったと思いますか。
 - (2) 紙しばいを作る時、ばめんや、うけもちをどのようにきめましたか。
 - (3) みんなの前で、紙しばいができるようによく読みましょう。

三、るすばん

- (4) えんそくや見学に行ったことを、紙しばいに作ってみましょう。
 - (1) みなさんは、どんなたいで作文をしますか。文だいちょうに書きましょう。
 - (2) 「るすばん」の文は、どこがよく書いていると思いますか。
 - (3) どんなことから書き出してありますか。どんな話しあいを「」の中に入れてありますか。
- #### 四 おたまじゃくし
- (4) お手つだいたしたことを、このようにわしく書いてみましょう。
 - (1) おたまじゃくし
 - (1) かえるのたまごを、どんなところで見つ

けましたか。たまごを、どのようにしてそだてましたか。

(2) たまごから、おたまじゃくしになっていくようですが、どのように書いてありますか。

(3) 生きものをかって、そのようすを、かんさつ日記に書いてみましょう。

五 駅ではたらく人

(1) 四つとも、お友だちの作った「し」です。なにをどんなふうに見ていますか。

(2) どの「し」がすきですか。すきなわけを友だちと話しあいましょう。

(3) 見たことや、はっと思つたことをこのような「し」に書いてみましょう。

六 つぎたし話

(1) つぎたし話は、どんなあそびですか。

(3) 工作や、あそびをだいにして、文を書きましょう。

九 夏のおたより

(1) 夏休みには、どんなことをしますか。

(2) 三つの手紙には、海や山や町のようにすが、どのように書いてありますか。

(3) 夏休みの生かつをこのような手紙に書いて、先生や友だちに出しましょう。

十 魚市場

(1) さかなは、魚市場へ、なんて運ばれてきますか。

(2) みなさんの食べるさかなは、どこからくるのか、しらべてみましょう。

(3) さかな屋さんのみせを見たり、話をきいたりして、さかな屋さんごつこをしましょう。

(2) あきらさんたちの、つぎたし話は、話のすじがどのようなようになっていきましたか。

(3) おおかみの考えと、きつねの考えとはどのようなにちがっていますか。

(4) 友だちと、つぎたし話をしてあそびましょう。

七 さいしゅう

(1) おじさんは、なぜ小石をなげたのでしょうか。

(2) あきらさんは、どんな心持ではこの中のクロアゲハを見たのでしょうか。

ハ ぼくのヨット

(1) どんなじゅんじょで、ヨットを作りましたか。むずかしかったところや、くふうしたところはどこですか。

(2) どんな気持で川にうかべましたか。

十一 帰る鳥くる鳥

(1) つばめはなぜ、「春には早くまたこよう。」と、いつているのでしょうか。

(2) がんのなかまは、海の上で、どんな話しあいをしましたか。

(3) つばめやがんを「わたり鳥」といいます。そのわけを考えましょう。

十二 ふしぎな森

(1) なんかいも読んで、じょうずに読めるようにしましょう。

(2) 三べいさんは、おうちもたべものもない小鳥に、どうしてやりましたか。

(3) 木は、小りすたちが木わたりしているのを、なんのためだと話していますか。

(4) 三べいさんは、かしの木のどんなところにかんしんしましたか。



あたらしく出たおもなことば

アオスジアゲハ 63
 あご 33
 あじ 74
 あど足 36
 あぶらげ 55
 いかにも 41
 生きもの 43
 いたずらっ子 109
 魚市場 81
 うけ持 9
 うずまき 35
 駅長さん 39
 えび 28
 えら 34

おいつき(ました) 63
 おおかみ 47
 屋上 83
 おしまげ(られて) 112
 おたまじゃくし 28
 かじ 68
 貨車 37
 かつおぶし 35
 かば 79
 かみなり 101
 かめめごう 69
 かれい 10
 考えごと 40
 かんさつし(ましよう) 32

かんさつ日記 31
 かんばん 65
 キアゲハ 58
 きずい(た) 7
 きゆうしゅう 37
 教室 30
 木わたり 107
 くさつ(て) 86
 くすくす 50
 クロアゲハ 58
 けずつ(た) 35
 工場 86
 小ぎれ 67
 小ざら 104

こし(たり) 13
 こわごわ 53
 さいしゅう 58
 さかな屋さん 92
 三かく紙 60
 したく 71
 島 87
 しみこむ 42
 しゅうてん 81
 しょうどくし(て) 13
 しんごうする 38
 すいつい(て) 33
 水道 13
 水そう 30

スピーカー 39
 スピード 51
 せきたて(ます) 51
 石炭 38
 せっかく 62
 そうだんし(て) 9
 たてもの 81
 だるまさん 31
 中学校 24
 つぎたし話 45
 つけね 36
 つま先 44
 ていぼう 15
 鉄 69
 デパート 80
 てんびんぼう 55

とうふ屋さん 55
 とくい(そりに) 54
 どぞう 77
 どのさまがえる 29
 とも 65
 長ぐつ 82
 流れ木 96
 ナミアゲハ 58
 なみ木 7
 波のりボート 17
 日曜日 64
 にゅうどう雲 88
 ぬいつける 67
 ねらい 109
 のこぎり 65
 バケツ 29

ばちんこ 108
 花ざかり 8
 はらわた 36
 ハンカチ 12
 ひこうき 17
 ひとりごと 63
 ひょうし 106
 ふえ 11
 ふな 28
 ふもと 95
 ふろ場 44
 へいきだ 44
 へさき 65
 ホーム 37
 ほっかいどう 37
 ほばしら 66

ほろほろと 94
 本町通り 26
 まだら 60
 まめ自動車 17
 まるた 65
 みね 95
 虫めがね 32
 もけい 74
 ものすごい 50
 森 98
 やなぎ 94
 ゆったりと 71
 ゆびさし(ながら) 84
 ヨット 64
 よわむし 50
 わいわい 70

伏高新
石橋井
繁庸五
男男郎
横竹島
川原田
洋聖ま
千さ
お
六藤鈴
郷沢木
好龍寿
見雄雄

絵をかいた人

このほかの文は、へんしゅうぶと
じどうのもの。

十二 ふしぎな森
十一 (一) 帰るつばめ
二 さくらのどて
一 空

坪田譲治
浜田広介
浜田広介
平木二六
岩橋 脩

文をかいた人

Approved by Ministry
of Education
(Date Sep. 29, 1949)

発行所

二葉株式会社
東京都北区稻付町一丁目二〇八番地

印刷者

二葉株式会社
東京都北区稻付町一丁目二〇八番地
代表者 大野 治 輔

発行者

二葉株式会社
東京都北区稻付町一丁目二〇八番地
代表者 大野 治 輔

著作者

西原慶一 泉 節二
山下正雄 飛田多喜雄
小山玄夫 齋田 喬

定価 円 銭

昭和二十四年九月二十九日印刷
昭和二十四年十月三日発行
(昭和二十五年 月 日 文部省検定済)

国語の本五(小学校第三学年前期用)

北	買	持	負	駅	夕	林	見
(91)	(80)	(59)	(45)	(37)	(19)	(10)	(4)
流	魚	池	待	力	表	集	行
(96)	(81)	(61)	(50)	(37)	(22)	(12)	(5)
米	市	落	乘	貨	朝	食	世
(104)	(81)	(62)	(51)	(37)	(26)	(15)	(6)
頭	晴	形	勝	身	教	配	界
(110)	(81)	(65)	(52)	(41)	(30)	(16)	(6)
運	刀	近	体	室	安	帰	
(85)	(68)	(52)	(41)	(30)	(16)	(8)	
南	鉄	屋	地	当	動	絵	
(86)	(69)	(55)	(43)	(31)	(17)	(9)	
工	夏	歌	場	番	発	字	
(86)	(73)	(57)	(44)	(31)	(17)	(9)	
島	多	曜	葉	毛	船	電	
(87)	(79)	(58)	(44)	(34)	(18)	(10)	



なまえ

広島大学図書

0130449936



二葉株式会社

文庫

50

936